

## さいたま市における学力・学習状況調査

教育研究所

### 平成26年度全国学力・学習状況調査の結果

【小学校】(公立)					【中学校】(公立)						
		さいたま市	全国	埼玉県	大都市			さいたま市	全国	埼玉県	大都市
国語	A (主として知識)	74.2 (+1.3)	72.9	72.5 (-0.4)	73.3 (+0.4)	国語	A (主として知識)	82.0 (+2.6)	79.4	79.4 (±0.0)	79.5 (+0.1)
	B (主として活用)	58.2 (+2.7)	55.5	55.5 (±0.0)	56.3 (+0.8)		B (主として活用)	55.9 (+4.9)	51.0	51.5 (+0.5)	51.5 (+0.5)
算数	A (主として知識)	78.5 (+0.4)	78.1	76.9 (-1.2)	78.3 (+0.2)	算数	A (主として知識)	70.8 (+3.4)	67.4	66.2 (-1.2)	67.7 (+0.3)
	B (主として活用)	60.8 (+2.6)	58.2	57.8 (-0.4)	59.6 (+1.4)		B (主として活用)	64.0 (+4.2)	59.8	59.3 (-0.5)	60.9 (+1.1)

※大都市・・・東京23区と政令指定都市

### 1 本市における学力・学習状況調査の趣旨

本市では、市独自の調査である「さいたま市学習状況調査」を実施し、全国学力・学習状況調査の結果と併せて把握・分析することで、教育施策の成果と課題を検証し、その改善を図っている。また、各学校においては、調査結果や分析結果をもとに、自校の教育課程の編成及び個に応じた指導を見直し、さらなる充実に取り組んでいる。さらに、結果を児童生徒に還元することで、児童生徒一人ひとりが自らの学習状況や生活習慣等の改善に役立てられるようにしている。

### 2 平成26年度全国学力・学習状況調査における本市全体の結果

小6、中3の児童生徒を対象とした、全国学力・学習状況調査を平成26年4月に実施した。また、文部科学省より調査結果の提供を受け、8月に市全体の調査結果を公表した。

#### (1) 科目別平均正答率

すべての科目において、全国の平均正答率を0.4～4.9ポイント上回っており、学力については、引き続きおおむね良好な状況にあると考えられる。

#### (2) 正答数分布

児童生徒の正答数分布について、本市の状況と全国の状況を比較すると、小学校、中学校ともに、全国と比べて正答数が多い児童生徒の割合が高く、正答数の少ない児童生徒の割合が低くなる傾向がみられる。また、小学校国語A、算数A、中学校国語Aでは、正答数の少ない児童生徒の割合が、全国とほぼ同じとなる傾向がみられる。

### 3 本市独自の「さいたま市学習状況調査」と併せた分析

平成26年度、市独自の調査の対象を拡大し、教科に関する調査を小3から、生活習慣等に関する調査を小1から行った。今年度より、国立教育政策研究所教育課程調査官・学力調査官や文部科学省初等中等教育局視学官などを歴任された、共

栄大学の吉川 成夫（よしかわ しげお）教授より指導を受け、全国学力・学習状況調査の結果と併せて、市独自の調査の結果を分析した。また、さいたま市学習状況調査における各教科や生活習慣等の調査結果について、市立学校の校長、教員で組織するさいたま市学習状況調査教科等部会において、領域別や設問別等、詳細な分析を行った。その結果、児童生徒の学力について、全体としてはおおむね良好な状況にあると考えられるが、市全体として改善に取り組むべき課題も明らかとなった。

#### （１）学習上の課題

全国学力・学習状況調査において、算数の四則混合の計算の問題で、市の正答率が全国の正答率をやや下回った。市独自の調査の結果からも、計算のきまりについての理解が十分定着していない状況がみられることから、計算のきまりを用いて解く問題に繰り返し取り組むようにすることが重要である。

市独自の調査において、中２の国語で、自分の意見を加えながら、文章を書く問題で正答率が低かった。また、小５の国語で話題と自分の経験とをつなげて感想を述べる問題で無解答率が高かった。自分の考えを明確にして文章を書く力が十分でない状況がみられる。これらのことから、「書くこと」への抵抗感をなくし、自分の考えを表現することの楽しさを味わうことのできる学習活動に繰り返し取り組むようにすることが重要である。

#### （２）生活習慣等に関する調査結果の分析

全国学力・学習状況調査において、将来に関する意識や規範意識、家族とのコミュニケーションに関する質問項目など、全国と比べ肯定的な回答をする児童生徒の割合が高かった。本市において、これまで、望ましい生活習慣等の形成を重視して取り組んできたことの成果が現れているといえる。また、市独自の調査の結果から、自尊意識や規範意識などと学力に相関がみられ、望ましい生活習慣等の形成を重視した本市の取組は、学力

向上の視点からも重要であると考えられる。今後、調査結果を学年間で比較するなど、児童生徒を取り巻く環境や生活習慣等が変化する時期を踏まえて、望ましい生活習慣等の形成のため、児童生徒への働き掛けを工夫していくことが重要である。

## ４ 今後の方策、取組

全国学力・学習状況調査や市独自の調査の結果から、本市の児童生徒には、学力や望ましい生活習慣等がバランスよくはぐくまれている状況を読み取ることができる。今後も、学校・家庭・地域と連携・協力し、「知」「徳」「体」「コミュニケーション」のバランスのとれた子どもの育成に取り組んでいく。

#### （１）学力向上に関する取組

調査結果の分析から明らかになった課題を踏まえ、基礎学力向上のための市独自の取組である「基礎学力定着プログラム」の内容を見直し、学校における繰り返しの学習に活用する。また、市独自の調査を一層充実させ、学習内容の系統性を踏まえ、本市の児童生徒の学習状況を明らかにし、学校における継続的な学習指導につなげる。

#### （２）望ましい生活習慣等の形成に関する取組

まず、調査結果や分析結果を踏まえ、「心を潤す４つの言葉」推進運動や「人間関係プログラム」など、学力を支える豊かな心や豊かなかかわり合いを大切にしたい取組を今後も充実させていくことが重要である。また、小１から中３まで、全ての学年で実施した生活習慣等の調査を生かして、保護者の望ましい生活習慣等の形成への意識や児童生徒の成長への関心を高めるなど、家庭、地域との連携・協力に一層役立てていく。

#### 【参考】

教師用や児童生徒・保護者向けのリーフレット、さいたま市学習状況調査報告書など、本市の調査結果に関する資料を、教育研究所のWebページに掲載している。